

愛犬との ふれあいの俳句



冬

佐怒賀正美 選

特選

屋根裏に保護犬眠る三が日

浦城 亮祐

【評】保護犬を引き取られたのであろうか。保護される前の虐待があったのか、見知らぬ人がくると過度に怖気づいたり、常態をはみ出してしまふのだろう。親類や年賀客が訪れる三が日は、思い切つて屋根裏で過ごさせることにした。早く人馴れすることを願ひながら。

わが親は父母と犬冬紅葉

小川 舞香

【評】幼少の頃から愛犬と一緒に育つた。犬が自分を育ててくれたようなものだ。いつの頃からか、自分の肉親のように思うようになった。「と犬」がなんとも微笑ましく自然な述懐だ。冬紅葉の下を犬と遊んだり散歩したり。いまでも鮮やかな記憶が蘇るのだろう。

除夜の鐘百一匹と七足りず

犬鬮 詩

【評】この句は「犬」という語がない。しかしながら、「百一匹」と言われれば、ほとんど誰もがドイツの「101匹わんちゃん」を思い出すだろう。百八つの除夜の鐘を聴きながら、頭の中には犬たちの映像が浮かぶ。あと七匹足りない、ところで間もなく新年だ。

枯野に犬走る簡単な形になる

清水 一澄

【評】枯野に犬が走るときに「簡単な形になる」と気づいたのがこの句の手柄。句形は四・五・五・六と七音を越えや自由律的だが、句の中ほどで意味的な切れがあり、走る犬に即したようにリズムがよい。「形」は「なり」とも読めるがここは「かたち」でよい。

鬼やらい豆と子犬の跳ねる夜

須賀 毅

【評】こちらはショパンの「小犬のワルツ」ではないが可愛い句。節分の夜、豆まきをしているのだから、撒かれた豆が勢よく跳ねれば、子犬も跳ねるように豆を取りに走る。鬼の入り込む隙などなさそうなる。豆」と「子犬」を同格に叙したところ面白い。

募集要項

■日本での「犬」をテーマにした俳壇です。愛犬とのふれあいの中で得た感慨を俳句にしてご応募ください。
 ■一般部門と児童・生徒部門（中学生以下）の2部門があります。
 ■原則として、五・七・五の17音でまとめてください。応募作品には、四季折々の「季語・季節を表す言葉」を入れてください。
 ■募集期間は「春」（1～3月）・「夏」（4～6月）・「秋」（7～9月）・「冬」（10～12月）年4回の開催です。

入選

初富士を愛犬と見る橋の上

猪狩ほうほ

クリスマスイルミネーションめく首輪

石垣ようせい

亡き父の毛布に潜り眠る犬

岩中 幹夫

男らの浜の焚火や犬二匹

えとう樹里

冬座敷種火のように犬がいる

北村 純一

佳作

手作りのマフラー犬と色違い

足立 有希

アチコチと仔犬も駆ける師走かな

綾部 保知

かまくらや犬も呼ばれて仲間入り

石川 昇

夕時雨急かす主人と愚図る犬

小田 和夫

マフラーの揺れに合わせて踊る犬

小西 弘晃

落葉道どこに居るのか犬擬態

神納 嘉代

顔隠す息でサモエド落葉踏む

神納 清次

犬連れて熊鈴下げて野良仕事

菅野八恵子

晴れた日に冬山火事を知らず犬

都築 広子

傍らに犬を抱き寄せ晦日蕎麦

戸田めぐみ

犬の息朝霧の中溶けていく

中静 憲夫

節分の豆を拾いしブルドッグ

中野 弘樹

催で、開催ごとに最終月末に締め切ります。

■郵送での送り先…〒101-8552東京都千代田区神田須田町1-5（一社）ジャパネットラフ広報課「愛犬とのふれあいの俳句」係
 ■ウェブでの送り先…左記QRコード・JJC HPの専用フォームより入力してください。



入賞・発表

■開催ごとに以下の入賞句を選出します。
 特選…5句
 入選…10句以内
 佳作…20句以内
 児童・生徒の部入選…若干句
 ※入賞された方には、記念品（図書カード）をお送りします。入選句は会報誌「JJCガゼット」に掲載されます。

犬跳ねて舞い立つ雪の輝けり

古山 礼子

じつと見る仔犬の先で餅伸びる

塩田 真司

電話くるたびに犬鳴く冬館

富田 輝

我にだけ威張る小犬と日向ぼこ

袴田 奈月

犬連れて冬野に遊ぶ余生かな

三原 靖彦

大雪にゆんるり遊ぶ犬と犬

ながみねみこ

むささびやまねて飛び出す犬の影

服部 憧

歳の市犬を待たせて買う筈

土生 洋子

雪道に人犬人のじゃれた跡

舛田 美子

もらわれる犬にさよなら枇杷の花

松本 俊彦

愛犬と見上ぐる教会の聖樹

森山 博士

児童・生徒

そりすべり共にのる犬たくましく

古口 小夏（12歳）

犬とゆく聞こえてくる白鳥の始まりの声

小林 詩（14歳）

雪の道肉球しずかに日々を踏む

赤木野々花（15歳）